



ティアニー先生の診断入門 第2版

ローレンス・ティアニー、松村 正巳●著

大切なことは後から、わかる。

評者

佐藤 泰吾

諏訪中央病院・内科総合診療部

私は2000年—2004年までの4年間に何度かティアニー先生とともに過ごす幸せに恵まれた。松村理司先生(現・洛和会音羽病院院長)が中心となって運営されていた、舞鶴市民病院での「大リーガー医」招聘プログラムでの経験だ。

『ティアニー先生の診断入門 第2版』を読了した時、松村理司先生の声がよみがえってきた。「大リーガー医がホームランを打っているときに、何をポーっとしとるんや!」と、いら立ちとともに発せられた声である。

舞鶴市民病院における、ある日のケースカンファレンス。2年先輩が、ティアニー先生に症例提示。高齢男性で、細菌性髄膜炎の症例であった。症例のポイントは髄液から2種類のグラム陰性桿菌が検出されている点であった。「Great case! strongyloidiasis!」とティアニー先生はにこにこしながら答えられた。その瞬間のティアニー先生のしぐさは、しっかりと私の中に残っている。しかし卒後間もない私には、2種類のグラム陰性桿菌が髄液中に検出されることが、なぜ問題になりうるのか理解できなかった。正直に言うと、「strongyloidiasis」が何を意味するのかさえ知らなかった。私にはほとんど何もわからないまま、カンファレンスは終了した。ティアニー先生が部屋を出たあと、松村理司先生の前記発言。

『ティアニー先生の診断入門 第2版』はとてもわかりやすい文章と構成で記述されている。ケーススタディーもティアニー先生の思考を丁寧になぞることができるように作り上げられている。もちろん、

長年にわたりティアニー先生とディスカッションを積み重ねてこられた、松村正巳先生の配慮が行き届いているが故。思考の補助線になるcolumnも魅力的だ。閑話からはティアニー先生のお人柄がとてもよくうかがえる。

「Great case! strongyloidiasis!」から、10年以上の時間がたった。臨床の時間を積み重ねる中で、わからないことを抱え続けることの大切さを教えられた。その場ですべてを理解できなくても、その時の風景、言葉、しぐさを記憶にとどめおくことが大事なのだ。結果として、いつも大切なことは後から、わかる。

今の私には、2種類のグラム陰性桿菌が髄液から検出されているときに、なぜ「糞線虫症」を考えなければいけないのか、理解できる。そのために、何を患者から聞き出し、どのような背景を考慮すべきなのかも知っている。

『ティアニー先生の診断入門 第2版』は通読も容易だ。しかし、ここに記されている大切なことを、本当に理解できる日は、さらなる時を経た後であることも感じさせられる。

そのことを確認するためにも、数年後に再読したいと思わせる魅力に満ちた書籍である。

●A5 頁208 2011年

定価 3,150 円(本体 3,000 円+税 5%)

[ISBN 978-4-260-01440-3] 医学書院刊